



小田実全集（評論 第4巻）

戦後を拓く思想



講談社  
小田実全集  
Makoto Oda



## 新版への序文

この四年まえに最初の版を出した本は、いくつかの点において興味ぶかい。その一つをここで言え、いささか個人的なことになるが、それは、この本が「ベ平連」（「ベトナムに平和を！」市民連合）の運動を私たちが始めたであろうどこそこに出た本だということだ。あとがきの日づけは「1996年4月12日」で、「ベ平連」の最初のデモ行進が同じ月の二十二日なので、あとがきを書いたころ、私はデモ行進の準備をしていたのかも知れない。記憶はさだかではないが、きっと、そうなのだろう。ということ、私にとつて、それからの四年間の行為と思考の出発点はこの本にあつたということだろう。私は、「あとがき」のなかで、「私にとつて、戦後は『虚妄』ではなかつた。はつきりと『實在』した。それは、自分の手で拓いて行くべき対象として『實在』した」と書いている。私は、この本を出発点として、私は私なりに、その「あとがき」のことば通り、「戦後」を「拓いて」来たように思う。すくなくとも、そうした努力をして来た、とは言つてもよいと私は思う。

そこから出発して、さて、私はどこまで歩いて来たのか。新しい版を出すにあつて、私はもう一度自分で出発点をたしかめながら考えたいと思つている。

1999年10月2日

# 目次

新版への序文	3
I 「難死」の思想	9
「難死」の思想	10
「道義国家」から「痩せたソクラテス」まで	42
二十年を縦断する	56
沖繩のなかのアメリカ	106
II 体験と原則と原理	139
新しい「全体小説」への道	140
知識人をめぐる状況と問題	151
日本の知識人	160
「学生論」の試み	176
「近代化」論の過去と未来	185
特攻機のゆくえ	191
金網の〈なか〉と〈そと〉	198
「あたりまえ」を論じることの必要	204

疑問のすすめ

韓国について

私自身について

### III

さまざま現実とのさまざまな対話

なしくずしの逆コース

繁栄のイメージの先取り

廃墟のなかの虚構

「合理的」ということ

小さくなった「夢」の背後にあるもの

宙ぶらりんのエリート層

「第三の道」はどこへ？

絶対帰依の美しさのなかで

……の道の半ばで

日本の「性」について

新しい冒険者のイメージ

### IV

映画を話のマクラとしての

文化と文明についての考察

あとがき

220

225

237

253

254

266

281

295

307

319

331

345

356

378

388

399

503



新版  
戦後を拓く思想



I  
「難死」  
の思想

## 「難死」の思想

——戦後民主主義・今日の状況と問題——

### I

私は幼なかつたから、保田与重郎などいなかつた。高坂正顕も高山岩男もいなかつた。「総力戦理論」も「世界史の哲学」も「近代の超克」もなかつた。万葉集の文庫本も「葉隠」も、いかにして死ぬかの考察もなかつた。私の世界には、そのとき、そうしたものは何一つなかつた。

ということとは、私がそうした知識人的な理念やロマンティズムの介在なしに、戦争とじかに結びついてたということだろう。いや、戦争がいやおうなしに私に結びついてたのである。私が生れたのは一九三三年。十五年戦争はすでに始つていた。太平洋戦争が始つたとき、私は小学校三年生だつた。つまり、私は戦争のなかに生れ、戦争とともに育つたのである。私は平和を知らなかつたから、戦争がもつとも自然なものであつた。この私と戦争の結びつきは、知識人のそれよりも大衆のそれに似ていなくもない。彼らは、そうした理念やロマンティズムをなかだちとして、自らを戦争に結びつけたのではない。戦争がずるずるといつのまにか彼らの体じかに結びついて行つたのだろう。気がついてみると、彼らは戦争の渦のなかにいた。火焰のなかにいて、逃げまどつていた。お上のすることには不平を言いグチをこぼし、といつて積極的な反対も抵抗もせず、ときには熱狂的な

讚美の叫びをあげ、おおむね無意識的、無意志的、結果的に強力に支持し、また無意識的、無意志的、結果的に被害者となる大衆——知識人も結局のところそうだったにしても、彼らの場合、理念やロマンティズムによるなかだちがあつた。そのなかだちによつて、彼らのある者は積極的に戦争にとび込み、またある者はなかだちを自己欺瞞の道具として、戦争にひきずられて行く自分を許容した。大衆にはそうしたなかだちはない。私にもそれはなかつた。「大東亜共栄圏の理想」は、私にもわかつていた。それは、西洋のためにアジアは苦しめられて来た、今こそ起つて西洋をやつつけろ、というぐらいのお粗末な認識だったが、そのことは私にもなつとくできた。もう一つ、「天皇陛下のために」という考え方、これは理屈ぬきに自明の原理として私の体内にあつた。おそらく、この二つのいわば「公の大義名分」は、日本国民のたいていもつていたと見ていいだろう。

ただ、知識人がもつていて、私たちがもつていなかったものは、その二つに「私の事情」を結びつける手だてであり、それが理念でありロマンティズムであつた。「公の大義名分」と「私の事情」の対比を「公状況」と「私状況」というふうに言いあらわすならば、「私状況」を「公状況」に結びつけるものがなかつた。「私状況」は言論の弾圧であり徴用であり飢えであり、戦場に駆り出されることであり、究極的には死ぬことであろう。理念やロマンティズムは、「私状況」と「公状況」のあいだにあつて、「公状況」の圧力を和げるクッションとしても働けば、二つを結びつける接着剤としても働く。それを欠くとき、あるいはその量が足りないとき、状況が悪化するにつれて、「私状況」が壮大な「公状況」について行けなくなるのは当然だろう。状況の景気がいいとき、「私状況」と「公状況」はびつたりくつついていたように見える。開戦当初、私は「天皇陛下のために」死ぬのだと心

をたかぶらせたのだが、それから三年たち、すでに空襲を何度となく経験し、飢えに苦しんでいたとき、「こんな負ける戦争をなんで始めたのだろうか。」という意味のことを言った父に、私は腹をたて、「大東亜共栄圏の理想」を言い、「天皇陛下のために」という意味のキマリ文句を叫んだのだが、そのときには、自分でも「大東亜共栄圏の理想」や「天皇陛下のために」と自分とのあいだが妙にかけ離れてスカスカした感じで、気がわるかったことをいまだにおぼえている。たとえば、ここで空襲で黒焦げになって死ぬことが、なぜ、「大東亜共栄圏の理想」達成に役立ち、「天皇陛下のために」なるのか——それとはつきり意識していないまでも、私はそうした疑問のなかで生きていたにちがいないのである。

そして、私にとって、死とは——映画で見たり新聞で読んだりしたものではなくて、本当に自分の眼でおびただしく見た死は——決して、特攻隊員の死のように、たとえば「散華」という名で呼ばれるような美しいものでも立派なものでもなかった。また、彼らの死のように「公状況」にとつて有意義な死でもなかった。私が見たのは無意味な死だった。その「公状況」のためには何の役にも立っていない、ただもう死にたくない死にたくないと思われているうちに黒焦げになってしまった、いわば、虫ケラどもの死であった。その虫ケラどもは武器をもっていないかった。ということは、特攻隊員のように、戦場の勇士のように自らの死を「公状況」のために有意義なものとする手だてをもっていないかったことだろう。つまり、彼らは「私状況」を「公状況」に結びつける手だてを、思想的にも現実的にももっていないかったのである。後年になって、ホメーロスの「イーリアス」を読んだとき、私はしきりに彼らのことを思った。ポイボス・アポロンが怒りにまかせて矢を地上にむかつて放つ。

それに対して兵士はどうすることもできない。ただいたずらに彼らは倒れ、そのあと屍を焼く火が燃えさかったというのだが、そのように、空から火弾が降り、虫ケラどもは黒焦げになつて無意味に死んで行つた。しかし、まだ「イーリアス」の兵士たちには救いがあつたと言える。彼らは自殺するこゝとではできたのである。しかし、虫ケラどもにはそれさえできない。まず、彼らには、たとえば腹をかき切ることによつて「公状況」に殉ずることができるといふ（すくなくとも、そうした自信をあたえることのできる）理念やロマンティズムはなかつた。また、実際に腹をかき切るための道具がなかつた。つまり、彼らは、たとえば八月十五日に自害し果てた右翼の若者たち（ある意味では、立派であり、そして何より美しかつた）ともつとも遠いところにいた。もつとも遠いところで死んで行つた。彼らの死は立派でもなんでもなく、ただ、みにくく、その人たちの美学からもつともかけ離れていた。

私が八月十五日をめぐる死として思い浮かべるのは、その右翼の若者たちの死ではない。私が想起するのは、いや、いやおうなしにねちねちと私の記憶のなかにいつまでもあるのは、その前日だつたかにあつた大阪の上空襲のなかで殺されて行つた人たちの死である。その日、それまでほとんど無傷のまま残されていた、当時東洋一を誇る砲兵工廠は完全に壊滅した。そして、その工廠のなかで、その周辺で、おびただしい数の人間が殺されたのである。

あれこそ、もつとも無意味な死ではなかつたろうか。すでに敗戦は確定していた。私は工廠の近くに住み、したがつて防空壕のなかでふるえながらその地獄の午後をすごしたのだが、空襲のあとで、空からまかれた「お国の政府が降伏して、戦争は終りました。」云々のピラを拾つたのである。

あの死をどんなふうに考えることができるか。たしかなことは、彼らの死がいかなる意味においても「散華」ではなく、天災に出会ったとでも考える他はない、いわば「難死」であつたという事実、ただそれだけであろう。その「難死」は私の胸に突き刺さる。戦後二十年のあいだ、私はその意味を問いつづけ、その問いかげの上に自分の世界をかたちづくつて来たと言えぬ。「難死」に視点を定めるとき、私にはようやくさまざまなことが見え、逆に「散華」をも理解できる道を見出せたように思えた。

砲兵工廠の壊滅後、ビラの予告通り、敗戦が来た。敗戦は「公状況」そのものを無意味にし、「大東亜共栄圏の理想」も「天皇陛下のために」も、一日にしてわらうべきものとなつた。私は、中学一年生という精神形成期のはじめにあつて、ほとんどすべての価値の百八十度転回を経験したのである。「鬼畜米英！」と声高に叫んだ教師がわずかの時日ののちには「民主主義の使徒」アメリカ、イギリスの紳士のすばらしさについて語つた。その経験は、私に「疑う」ことを教えた。すべてのものごとについて、たとえどのような権威をもつた存在であろうと、そこに根本的懐疑をもつこと、その経験は私にそれをいまも強いる。

「公状況」が無意味になつたということは、「公状況」につながる死が無意味になつたということだ。ろ。すくなくとも論理的な意味ではそうなるにちがいない。つまり、ここにおいて、「散華」は「散華」すべき方向を失つて「難死」と同一線上に立つものとなつた。混乱が起るのは当然だつた。頽廃

が起るのもまた当然であった。ことに、戦場から帰って来た青年たちに——百八十度の価値の転換と「散華」の「難死」への転落が、たとえば「特攻隊くずれ」の精神風土をかたちづくった。

けれども、戦後の混乱の時代が過ぎ、人々の心が落ちつきをとりもどすとともに、かつてはただ糾弾することにのみ終始したあの戦争の意味を、もう一度考えなおそうとする動きが起つて来る。それはむしろ当然であろう。日本の自信の回復がナシヨナリズムを呼びさまし、人々の眼をその自信のよつて来たる歴史に向けさせる。そのとき、太平洋戦争の「偉業」(あれはたしかに「偉業」であった)が人々の眼に大きく映じて来るのもまた当然であろう。その「偉業」を行なつたのは誰なのか。あきらかに「難死」した男女たちではなくて、「散華」した若者たちだろう——人々は、もう一度、彼らの死の意味をとらえなおそうとする。それを、「散華」を「難死」からはつきり区別する態度で行なおうとする。国際情勢の変化(ことに、アジア・アフリカのあの戦争による結果的な解放、独立)、旧秩序、旧世代の復活、戦争を知らぬ、「難死」を知らぬ世代の誕生が人々のその動きに拍車をかける。

「散華」を「散華」として救い出すためには三つの方法があつた。第一に出現したのは、その意味をもつばら「私状況」と「公状況」の倫理的なつながりにかぎってしまう方法だつた。それははじめひかえめに現われ、のち着実に人々の心のなかにひろがり、ついには社会を大手をふつて歩きまわるまでになつた。論理的に考えるかぎり、論理的に無意味な「公状況」につながる死はまさに無意味だろうが、そこにたとえ「殉教」という倫理の意味を挿入すれば有意義なものとなる——その方法はそうした考えに基礎をおいた。そして、日本の倫理の基調には美があり、ちようど、乃木大将の自刃が論理的にはナンセンスでありながら当時の多くの人にとって倫理的には意味があつたように、また、その自

刃が古式にのつとつた美学的に完璧なものであったことで人々の評価がたかまつたように、たとえば死にのぞんだ特攻隊員の眼の澄んだ美しき、その頬に散りかかる桜の花びら、あるいは、私を殺して公に殉ずるといふ行為そのものの美しきが「散華」再評価の一つの基礎となった。その美しきは、それを支える「殉教の美学」は、たしかに「散華」を「難死」から、黒焦げの虫ケラの死から区別する。

この方法をとるとき、「公状況」は観察者の美意識の投影としてのみ、あるいはそれが投影する範囲においてだけ存在することになる。考えてみると、これはまことに賢明な方法であろう。この方法によれば、ファシズムの闘士もレジスタンスの闘士も同様に救い上げてゆくことができるのである。美意識に倫理が結びつけば、たやすくこうなる。「左翼も右翼も同じように国のことを考えたのだ。これは美しいことではないか。」——かつての日本の転向者のなかに、急進的左翼から急進的右翼へ転向した者が多かつたこと（西欧の場合に比しはるかに多い）の原因には、一つにはこうした事情が介在していたのではないか（この問題については、私は『日本の知識人』——1964年・筑摩書房——のなかで私なりの解明を試みている）。両極端が（美学的にも、倫理的にも）美しいものとして高く評価されるとき、たとえばリベラリズムが中間のヌエ的存在として不当に低い評価をうけるのは当然だろう。また、両極端を重ね合わせて見る視点には「難死」の姿はまったくないのだ。

この方法のチャンピオンは三島由紀夫氏だった。彼は「難死」重視の戦後の風潮のなかで、この方法にたよることによって、彼独自の世界をつくり上げた。いや、彼は自分の世界をつくつたばかりでなく、「難死」の洪水のなかで方向を失っていた青年たちに、政治信条の如何をとわず、一つの決定的な方向をあたえたと言える。三島氏の文学はどのように反倫理的な姿勢をとろうとも、きわめて倫

理的なものに私の眼には見えるのだが、それは、殉教の美、禁欲の美、抑制の美、雑駁を排した純粹の美が彼の世界の基調をなしているからなのだろう。そして、そうした美は、戦後の社会の雑駁にウンザリしていた日本の青年たちの心をふかくつかんだ。三島氏は古代ギリシア文学の愛好家として知られるが、彼の文学に投影する古代文学のかけは、これまでのところ、「散華」の人生を主題とした純粹で悲壯な悲劇のかけであつて、雑駁で豊饒な「難死」の可能性をもつて生きる人たちを主人公とした喜劇のそれではないのである。

この方法に附随するのは、ロマンティズムであろう。と言つても「難死」の群集のように女性的な金切声をあげるのではなく、抑制のよくきいた低い声で、ことば少なに簡潔に力強く語る（したがつて、漢文脈の文体が好まれる）、あるいは、ときとして饒舌の醜よりも沈黙の美をえらぶ、ますらおぶりのロマンティズム——それは、かつても、大きく姿を現わしたものではなかつたか。

第一の方法は、自己の体験、そこから生じる過去と現在へのいきどおりから出発しようとする第二の方法と容易に結合する。いきどおりはまず、自分たちをあの極限状況に押し込め、そして実際に同僚に「散華」を強いた過去（の指導者、国民）へのいきどおりだろう。それはそのまま彼らの「散華」を忘れ、それを無意味にして、ただひたすら「私状況」を追求する現在（の指導者、国民）へも向けられる。そのいきどおりの上に、第一の方法や次に述べる第三の方法とはちがったやり方で、人は独自の思想をきずき上げることができにちがいない。しかし、同時に、この方法が、第一の方法、第三の方法と無批判に癒着する危険性も大きく認めることができる。たとえば、高橋和巳氏、上山春平氏の考え方は、「散華」の意味を自らに問いかけることから出発して、あの戦争の意味、維新以来の

歴史の意味を未来への可能性と結びつけるかたちでみきわめようとするものだが（私はその彼らの意図を高く評価する）、高橋氏においては第一の方法、上山氏においては第三の方法への傾斜が目立つ。高橋氏は、彼と彼の仲間が（思想の如何を問わず）問題にしていたのは三島氏の文学であつたと述べていたことがあるが、高橋氏の純粹好みの倫理的姿勢（私には彼の作品はときには修身の教科書のように見える）は、余分な饒舌を排した漢文脈の文体とともに三島氏のそれと大いにあい通じるものがあつて、三島氏が人々の共感と呼んだのといくぶん重複したかたちで、大きな反響をひき起したのだろう。

もと人間魚雷「回天」の乗組員だつた上山氏は、体験といきどおりから出発して、もう一度「公状況」そのものの論理の意味に目を向ける。その具体的表現が「大東亜戦争の意義」を考え直そうとする彼の努力だが、その努力はそのまま次の安易な第三の方向に結びつく危険をもつ。彼のいきどおりには、あきららかに今日の「私状況」優先へのいきどおりがあるが、そのいきどおりは、ないがしろにされてしまつた「公状況」の復権、ひよつとするとそれを「私状況」よりも優先させるかたちでの復権を求めるにいたる。あるいはまた、今日の「私状況」優先の風潮に欠けている（と考えられる）ストインズム、規律、服従の精神をそれはまた求めるのであるが、そうしたものはもつとも安易に自衛隊の隊内に存在し、したがつてもつとも安易にそこに見つけ出され得るものなのだ。

第三の方法は、第一、第二の方法を集大成したかたちで現われて来たときと見ていいだろう。この方法は、そのチャンピオンが林房雄氏であり、彼の『大東亜戦争肯定論』であると言えbaumうわかることだが、「公状況」に、もう一度、論理の意味を回復させるやり方である。完全にはなくとも、いくぶん

も論理の意味が回復するとき、それだけ「公状況」につながる死の意味もよみがえって来る。とすれば、この場合、もつとも有効なのは、「公状況」の大義名分を類似のものとするり代えてしまうことである。たとえば、「大東亜共栄圏の理想」が「アジアの解放、独立」に、「天皇陛下のために」が「国家への忠誠」に——それぞれ二つのものには、重複している個所があるにはちがいない、その個所に重点をおき、他の個所は不要なものとして切り捨てることによって、すり代え作業は行なわれ、そこで「散華」は「難死」から自らを区別することができた。このようにして、たとえば「大東亜共栄圏の理想」は、西洋の圧制に対してアジアの解放を企図するだけのものとなって、その侵略主義的な半面はまったく無視される。

林氏の方法をうらうちするのは、彼の純粹好み、殉教の美学、ますらおぶりのロマンティズム、悲壮感にみちたナシヨナリズム、せつぱつまつた極限での倫理的姿勢などであるだろう。そういったものが集まって「公状況」の全面的肯定を要求する。山岡荘八氏が昨六三年『小説現代』に連載して好評だった『小説太平洋戦争』も、林氏の線上に立つものだろう。彼はマレイ戦線での山下奉文將軍について次のように書く。「彼は皇軍を、どこまでも正義を行う厳正な軍隊であらしめたいばかりに、皇民は、人類に奉仕すべき民、皇道は、生命を捨てて、それを実践してゆく道なのだという夢を描いている。これはもはや殉教的な信者に求める純粹な宗教的境地でなければならぬ。」これは当時の山下將軍の夢や境地であるとともに、現在の山岡氏の夢、境地であるのかも知れない。けれども、当時のマレイ戦線での「皇軍」の状態は、決して、その夢、境地にとつて満足すべきものではなかった。まず、「士官学校や陸軍大学校で点取り勉強をしてきた」連中がたむろする総司令部が腐敗していた。

ついで「自我心に駆られ、ただ利害のみに眩惑されて、このたび徴用せられ、死生の地に立たしめられたることに関し、甚しき不平」ある徴用者が腐敗していた。まこと「千載一遇のとき、このときこそ自己の腕を国家のために揮うというがごとき意気あるもの一名もなし。」という状態だった。「そうした眼で眺めたら、総司令部も、徴用されて来た軍属たちも、汚れきつた雑巾に見えてゆくに違いなかった。」しかし、山下將軍にとつて、また、山岡氏にとつて、救いは兵士たちであった。「日々死んでゆく兵隊たちの中にはほんとうの殉教徒が、砂金のようにチラチラ光つて混っている。それがロマンチストであり、正義漢である山下奉文にはたまらなかつたのであろう。砂金と雑巾……これを携えて、彼は金色の理想郷をマレーの地へ築きあげようとしているのだ。」これは、山岡氏の夢そのままであるのかも知れない。彼もまた「砂金」と「雑巾」（ここには「総司令部」と「難死」の人々を乱暴に同一視しようとする態度がある）をたずさえて日本の地に理想郷をきざさず上げようとするのかも知れないが、それはどのような理想郷であるのか。すでに「砂金と雑巾」ということば自体が、「死生の地に立たしめられたことに関し、甚しく不平」をいだきながら、また、「千載一遇のとき、このときこそ自己の腕を国家のために揮うというがごとき意気」もその手段も（彼らには自殺用の武器さえなかつたのだ）もたずしてむなしく無意味に死んでいった人々の「難死」をはつきりと無視しようとしていることを示しているのだが。――

そしてまた、そのことばは、「散華」の「難死」的側面をことさらに見まいとする彼のロマンティシズムの反映でもあるのだろう。「砂金」であつた兵隊たちについて、野間宏氏は書く。「そして初年兵はようやくやくにして古年兵の攻撃から自分の身を守り、初年兵の敵は、自分達の前方にいる外国兵で

はなく、自分達の傍にいる四年兵、五年兵、下士官、将校であった。」状況の景気がよいとき、人はどのようなロマンティックな幻想も抱くことはできる。しかし、極度に悪くなれば、「砂金」である兵隊たちも「食糧のためににらみ合うだろう。戦友を見殺しにするだろう。」（『顔の中の赤い月』）もちろん、野間氏の見方も、全面的真理をおおうものではない。どのような状況下にあっても、「砂金」が「砂金」として残る場合がある。いや、ときとして、同一人物のなかでさえ、「砂金」が「雑巾」と分かちがたく結びついていて——そのことに眼を向けようとしなかったのは、戦後文学一般に通じる欠陥であったと言うほかはないが、山岡氏の見方はそれ以上にまちがっていた、というよりは傍観者の無責任なロマンチックな夢であるというほかはない。彼のやり方は、夢（公状況）を現実（私状況）にあわせるのではなく、現実を夢にあわせようとする政治的ロマンティストの方法の一つの典型なのであろう。

このロマンティズムは、解放すべきアジアにも向けられる。林房雄氏は、日韓併合をもつばら日本の立場のみから書く。あたかもアジア全体の解放のために、それが必要であったかのように。また、山岡氏は、「マレー半島の確保は、確保がそのまま住民の感謝につながる性質のものでなければならず……」と書くのだが、その命題をあたかも現実そのもののようにみなしてはいなかったか。その彼の視界には、日本のことをはつきり「敵」と『インドの発見』のなかに書き記し、その「敵」と闘うためには、イギリス帝国主義とさえ手をにぎることを辞さなかったネルーの姿は入ってはいないのである。

今日「戦後文学」の名のもとに総称される文学がしたことは、かつて絶対者であった「公状況」にしっかりと結びつけられ、自らをそのかたちにあわせて変形させた「私状況」をそこから切り離すことであった。方法はいくつもあった。たとえば、「私状況」を「公状況」につなぎとめていた接着剤の理念やロマンティズムを洗い流すことによって、「公状況」の無意味さを明らかにする。それは、その無意味な絶対者につながつて生きて来た「私状況」の愚劣を明らかにすることもあった。「公状況」は、必ずしも戦争イデオロギーばかりではない。マルクス主義、共産党という「公状況」にあつても、その絶対者の側面がとり出されて、そこから「私状況」をいかにして切り離すか、それに対して「私状況」の独立をいかにして保つかが論じられ、また作品が書かれた。

しかし、「戦後文学」は、二つの大きな欠陥をかかえていた。一つは「戦後文学」者の眼が、「私状況」の「公状況」からの分離にばかり注がれたので、彼らの描く「私状況」はもっぱら「公状況」と結びついた部分の「私状況」であつて、他の多くの部分が無視されてしまったことだろう。それによつて、たとえば、作品の日常性が無視され、ユーモアが外に追いやられる。主人公はいつでも深刻で、壮大な思想に悩み、シニカルな自嘲の笑いを笑う以外は笑うこともなく、子供の笑顔を見て心がなごむなどということはない存在となつた。

この状態は、世の中が落ちつき、かつての「公状況」の幻影が消え、「私状況」優先の原理が社会に確立されるともにはつきりする。そのとき、まず「私小説」の復活があつた。ついで、より深刻

で意味のあるかたちで、「公状況」の下に痛めつけられた「私状況」を背負って「第三の新人」が登場する。彼らは、たとえば、あの「公状況」の重圧の下でも、そこからはみ出した部分をもって「私状況」を、そこに重点をおいて、たとえば「真空地帯」のなかにおいてさえ、そこからはみ出てしまつたぐうたらな二等兵を描くことによつて明瞭にした。その方法は今日にあつても有効に働く。

「戦後文学」のいま一つの欠陥は、かつての「公状況」の破壊そのものにあつた。「戦後文学」にあつては、「私状況」は「公状況」と（否定的にせよ）つながることによつてのみ存在理由をもつていたので、後者の破壊は前者の自己破壊ともなつた。そこで、救うべき道はおよそ四つあつた。一つは、「公状況」とのつながりを無視して「私状況」に沈潜する道。これは梅崎春生氏のとつた有効な方法だったが、「戦後文学」の自己破壊ともなつた。第二は、ふたたびマルクス主義という強力な「公状況」をもつこと。この道をとつたのはたとえば野間宏氏だろう。その「公状況」が絶対者となつたとき、彼は『雪』の声か……』という駄作を書き、「私状況」にふたたび眼をすえたとき、『さいころの空』、『わが塔はそこに立つ』などのすぐれた作品を書いた。第三は、「公状況」を文学以外のこととして外に押し出してしまふ態度である。これと重複したかたちで、三島氏は、さきに述べた、「公状況」は手つかずに残してその論理的妥当性を問題にすることなく、「私状況」と「公状況」のつながりだけを美的に、倫理的にとらえて行く第四の方法をとつた。この方法ではどのような「公状況」をもつて来ても文学は成立するのだから、これは有効で射程の長い方法だった。そして、この方法は、持続的な長い日常的な時間のなかにおいてよりも、美と倫理が鋭く姿を見せる瞬間的な極限状況においてみごとに作動した。つまり、この方法は長篇小説的であるよりも短篇小説的であり、叙事詩的であるよりも抒情詩

的であるのだろう（三島氏の成功作が、すべて、短篇小説的長篇小説であることがその一つの例証である）。

この方法は、桜の花がいさぎよく美しく散るのを好む日本人の心性にぴったりする。ことに、純粹を好む青年の心に——極限状況における美と倫理を問題にするとき、ともすれば、その状況に至る途中はそこに到達するまでの過程としてしか存在しないものとなり、極限状況のあとには死でなければ、「挫折」ということになって、それはもう余分の無意味な人生を生きていることにしかならない。あるいは、そこで生れ變つて、まったく別のたぶん汚辱にみちた人生を生きる。つまり、これは、「散華」しそこねたあとでは人はいわば「難死」的に生きなければならぬのだが、その「難死」的人生（ひいては「難死」そのもの）が、まったく価値のない無意味なものであるということなのだろう。そして、もう一言つけ加えるならば、汚れちまった体だ、いっそ「難死」的人生のなかでもっとも「難死」的に汚れた人生を生きようということにもなる。

「挫折」感にみちあふれたとき、人は「難死」的人生の門口に立っている自分を自覚し、ひそかにつぶやく。「私のような者でもなんとか生きたい。」

#### 4

そのことばは二つのことがらを暗示する。一つは、社会のなかですでに自分が歴史を動かす主役でないこと。もう一つは、それゆえに社会、歴史に対して自分は何ら責任をもたないこと——敗戦まで、「難死」的人生、「難死」はまさにそうしたものであった。「散華」的人生、「散華」が社会、歴史の主

役であり、それを動かしていた。

敗戦はその事情を逆転させる。その逆転は、「難死」の側に、それが完全な成功であると錯覚させるほどに完全な逆転であったのだろう。民主主義の「到来」は、「難死」を歴史の主役としたが、また同時に、社会、歴史に対して責任ある地位においた。ということは、戦争のイデオロギーの「公状況」が打ち倒されたあとで、新しい「公状況」を打ちたて、それと「私状況」との結びつきを考えなければならなかったということだったのだが、「難死」はそれを十分にやっただけとは言えなかった。「難死」には、「公状況」は占領軍のやることだといったところがあり、その事実が、大熊信行氏の戦後民主主義の歴史は占領終結後に始まったとする説の一つの論拠となっていているのであろう。

どのような政治原理にあっても、「公状況」を欠いてはそれは成立しない。民主主義もまた例外ではない。ただ、全体主義の場合、「公状況」がまずあって、それが「私状況」を規定するのに対し、民主主義においては、「私状況」が「公状況」をつくり出して行く度合いが大きい（ただし、大きいのであって、完全にそうだということではない）。つまり、後者は「私状況」を「公状況」に結びつけるのではなくて、「公状況」を「私状況」に結びつけようとする。原理的には、そうしたものでないかぎり、それは民主主義ではない。このようにして、「私状況」優先の原理を、民主主義は本質的にもつ。

人々の心をとらえたのは、この「私状況」優先の原理だった。これによって「難死」は救われたのである。占領開始後、日本の民主化（ことに、人々の意識の民主化）が予想以上に進んだのは、日本人の「長いものにまかれる」という心理や占領軍の強制だけによるものではない。長いあいだの「公

状況」の強制の下で、その下では「難死」の可能性しかもたなかった人々が、「私状況」優先の原理を通してそれを求めたのだという事実を見逃しては大きな誤りだろう。「民主主義の世の中になったのだから（もう規則なんかまもらなくてよい）」と人が軽薄に無責任に放言するときでさえ、そのことばの底には、（もう無理して国を愛さなくてもいいのだ）、（天皇陛下のために死ななくてもいいのだ）という気持があつたにちがいないのだ。

戦後の日本の社会を解明するには、この「私状況」優先の原理の解明がまず必要だろう。その原理は急速に社会のすみずみにまでひろがり、日本の戦後民主主義はその上にぎざされた。進歩陣営の運動にも同じことが言える。戦後の左翼運動を戦前のそれと分つ鍵は、おそらく、この点に求められるのだろう。戦前の場合、「公状況」の大義名分がまずあり、それに「私状況」がひきざられた。戦後はちがう。まず「私状況」があり、多分にその状況の権利拡大をめざすことで、あるいは、反動的な「公状況」がふたたび「私状況」を圧殺することへの恐れの上で、運動は進展した。一部の論者は、日本人の半封建的心理に運動の進展の理由を求めようとするが（マルクス主義という「公状況」の絶対者の「私状況」への強制というかたちで）、その説明はある程度当つていても、全体的に見て正確ではない。また逆に、「日本に革命を！」という大義名分が人々の心をとらえたときに見る見方も部分的にしか正確ではない。安保闘争があればどの大きさのものになったのにも、私はそこにまず「私状況」優先の原理を見る。同時に、あれほどの大きさのものになりながら、結局、安保条約改訂阻止に成功しなかつたその限界にも。――

くり返して言おう、戦争が終つて「民主主義」が「到来」したとき、人々の心をとらえたのはそ

れがもつ「私状況」優先の原理だった。「公状況」を生み出す余裕はまだなかった。それは占領軍によつてあたえられた。しかし、そのあたえられたものは、たとえば「民主国家、平和国家、文化国家、自由な日本の建設」であつて、それは「私状況」優先の原理と矛盾するものではなかった。そのとき、日本人の「私状況」のほうに「公状況」を生み出すだけの力があつたとしても、同じものを生み出したかも知れない。その「公状況」はそのまま「私状況」に浸透してゆき、「私状況」のなかにごつかりと腰を下した。このとき、すでに、それは借り物のものではなかつただろう。「土着化」ということばをそこにもつて来てもよい。新憲法が公布されたとき、私はそれを「これで世の中が変わた。」というような感激をもつて受けとらなかつた。むしろ、「何を今さら」という気がしたのである。天皇は人間であり、戦争は放棄すべきものであり、人間は平等であり、言論の自由はいかなる場合にもまもるべきものであり……そういうことは、すでに、私の体内に土着化していたにちがいない。「何をまだぐずぐずそんなことを言っているのか。」私はそんなふうにさえ思った。その一つの証拠に、新憲法が發布されたのは一九四七年のことなのだが、私も私の友人、知人も、その年で記憶していることは、「二・一・一スト」中止であつて新憲法發布ではないのだ。そして、その新憲法の發布にさきにかけてさえ、理想の土着化には、私、私の友人、知人の「難死」的体験があつた。

「私状況」優先の原理は、そのとき、「公状況」と矛盾することなく存在し、「難死」的体験、思想にうらうちされて、戦後社会の基礎をつくつた。たとえば、新教育の原理はそこにかたちづくられたと言つてよい。それは今日までの二十年間にさまざま変形、ゆがみを受けて来たし、今も受けつつあるが、私は私の教え子たちの中にも、その産物だとはつきり指摘することができる、そして戦前世代

の人たちとは明瞭に区別できる心理、思考、行動を容易に見出すことができる。「私状況」優先は、また、当時の世界的傾向であった。それが日本の社会に、占領軍の政策を通して、その原理を打ちたてるのに大いに役立った。体制の如何をとわず、戦争中には、「国家のため」を第一義とする「公状況」が優先した、いや、強制されたのは言うまでもない。戦後はその反動だった。自由主義国のあいだでまず復活したのは「私状況」優先の原理であり、それは世界中をおおい、スターリン死後には、長いあいだ「公状況」優先の社会だったソ連にも「私状況」（優先とまではいかにしても）重視の風潮が現われた。

けれども、冷戦の激化、世界情勢の危機、より正確には危機感、ふたたび、世界に「公状況」の力を急速に回復させて行つた。その回復をうながしたものには、「私状況」優先のなかで育つて来た若い世代の墮落を叫ぶ旧世代のいきどおりの声もあっただろうし、また、戦争を知らぬ、「公状況」の強制のおそろしさを知らぬ当の若い世代が、倦怠と危機感の双方からふたたび明確な「公状況」に自らの「私状況」を結びつけることを欲して来たという事情もあった。あるいはまた、「公状況」をまずふりかざして国づくりをする（ほかはない）新興国が刺激をあたえたのも見逃せない事実だろう。そのさまざまな要因が、ふたたび、「公状況」優先を求めさせる。

おそらく、「二・一スト」中止が、日本の場合の「公状況」優先のさきがけであつただろう。そのとき、「私状況」は「公状況」と衝突し、あえなく敗北した。その「公状況」はもはや「民主国家日本の建設」といった大義名分ではなく、占領軍による秩序維持という絶対的なものであつた。それは、たとえば「私状況」万能の流れのなかに育つて来た私や友人、知人に大きなショックをあたえた。さきに述べたよ

うに、一九四七年というとき、私たちは新憲法発布を記憶していないで「二・一スト」中止を記憶にとどめているのである。そして、そのあと、さまざまに、どこかにかつての臭気のある「公状況」が次々にやって来た。朝鮮戦争。レッド・パージ。共産党代議士の追放。警察予備隊の創設。……

「私状況」優先の原理は、もろ刃のやいばだった。それは、たとえば、まず、「難死」の最大責任者である天皇の戦争責任を曖昧なものとした。彼のかつての「私状況」を強調することで（天皇陛下個人は戦争に反対だったのだ、というふう）、「公状況」と彼のつながりを不明確にした。その「私状況」優先の原理は戦後の天皇にも向けられる（「天皇ご一家のご団欒」の写真）。おそらく、天皇の「人間宣言」ほど、彼と彼の戦争責任を「私状況」優先の原理のなかに埋没することに役立ったものはないだろう。同じような理由で、「私状況」優先の原理は、旧指導者層の戦争責任を曖昧なものとし、彼らの勢力温存を実現したのである。「私状況」優先の原理によって生きのびた彼らは、占領軍による新しい「公状況」の呼びかけに応じて、それまでかくれていた「私状況」のなかから姿を現わした。さらに、「私状況」優先の原理は、一切の「公状況」に無関心の風潮をもかたちづくる。「政治なんかおれの知ったことか。」ときにはそれは「公状況」への強い反対の力ともなるが、その原理自体の性格によって、徹底的な力とはなり得ないのだ（具体的な例、安保闘争）。

「私状況」の優先から「公状況」優先への転換を、いまし世界的に見てみよう。アメリカの場合、明確な折り目はケネディ大統領の就任だった。私の知人のアメリカ人は、前任者アイゼンハウアーはおじいさんだったのだ、孫を集めて、世界はさわがしいがアメリカのことはなんにも心配しないでいい、心配しないで勉強しなさい、万事わしにまかせておきなさいと説き、それが当時の若者にフラス

トレイションをまき起したのだと言うのだが、このことばは、アイゼンハワーが「私状況」優先の原理の持主であったこと、また、その原理が若い世代のあいだで不人気であったこと、彼らが確固とした「公状況」を求めたがっていたことをよく示しているのだろう。ケネディは、アメリカは危機におちいつていると率直に述べて、若者たちの「公状況」参加を求めた。ジョンソンはそのケネディの線をひきつぎ、そして、ゴールドウォーターは、「強力な国家だけが平和を維持し得るが故に、われわれは強力な米国を求めている。」と叫ぶ。

フランスでは、ドゴールだった。彼の事業、E E C、核兵器の所持、アルジェリア問題の解決、中国との提携——すべてがフランスの威信をたかめ、「公状況」の「私状況」への強力なまき返しとなった。世界的に言つて、ドゴールの再登場は、世界の「私状況」優先から「公状況」優先への転回に大きな役割をはたしているのだろう。一切の「私状況」を無に帰する核兵器をもつ彼の国が、戦後このかた「公状況」優先の原理をつらぬき通し今また核兵器保有国となった中国と手を結んだことは大いに興味ぶかいし、また危険なことでもあるにちがいない。

その風潮はまだまだひろがって行く。その最近の事実として、私たちは、「私状況」重視をと考えたフルシチョフ氏の退陣をもつ。

こうした世界的風潮を一語で要約してみよう。一語——つまり、ナショナリズム。

## 5

人々の議論をきいていると、ナショナリズムにはさまざまなかたちがあるらしい。たとえば、開か

れたナシヨナリズム。閉ざされたナシヨナリズム。インターナシヨナリズムに通じるナシヨナリズム。土着ナシヨナリズム。私も自分の戦争体験、戦後体験また世界旅行の体験から、現在の世界のナシヨナリズムを次のように分けてみよう。「戦勝国ナシヨナリズム」、「戦敗国ナシヨナリズム」、「新興国ナシヨナリズム」。

「戦勝国ナシヨナリズム」は矛盾のないナシヨナリズムである。戦争中のアメリカ兵士やソ連兵士のことを考えてみよう。彼らには、ファシズムを打倒する、あるいは、ファシズムに対して祖国をまもるといふ「公状況」の大義名分があったのだが、その大義名分の正当性を彼らはそのとき少しも疑わなかったし、戦い終って二十年たった今も、それはおそらく同じだろう。いや、彼ら自身だけではない。そこに帝国主義の臭気をかぎとるようなごく少数者をのぞいて、彼らの同胞のたいていがその正当性をそのままに信じていることができた。その信念があるとき、たとえば空襲のさなかに火焰にのまれた人をも、有意義な死をとげたものとみなすことができるだろう。そして、その信念の上に、彼らは今ふたたび彼らのナシヨナリズムをきずき上げ、そのナシヨナリズムを背負って、たとえば「自由の擁護」のためにキューバに、ベトナムに出かける。

戦敗国の私たち日本人の場合はどうか。林房雄氏などをのぞいて、「公状況」の大義名分の正当性を百パーセント信じていることは、その当時はともかくとして、今日では誰にもできないことだろう。「大東亜共栄圏の理想」の大義名分のために戦ったことは侵略戦争の一翼をになうことだった。あるいは祖国のために戦ったことは、ナチズム擁護のために戦ったことにもなった。祖国に弓を引く道をえらんだ少数者を除いて、大多数は、もし自分の「公状況」に正当性がなく、敵のそれにあるとそのとき

考えたとしても、やはり、たんなる怯懦からではなく、祖国を護るといふ自らの意志の選択によつて戦線にとどまつたことであろう。けれども、結果的には、それによつて、本来なら自分たちが打ち倒すべきであつた勢力を護ることともなつた。

こうした複雑な事情は、「戦勝国ナシヨナリズム」による人たちには、想像もできないことなのだろう。アメリカ人にそれを言うとき、人々は絶句した。「きみならどうするかね。」私はいつも自らに問いかけるかたちでそう訊ねるのである。おそらく、この事情を今もつて背負つて生きているのは、日本人以外ではその程度はかなり落ちても、やはりドイツ人だろう。私は、最近の『パーティザン・レビュー』で、戦争中のローマ法王のユダヤ人に対する処置を問題にした戯曲『代理人』を書いたホッホフートが、アメリカ人記者の質問に答えて私と同じような答をしているのを読んだ。

そして、さらに事態を複雑なものとするのは、彼らをその大義名分の下に戦場に駆り出した旧指導者が無傷のまま再登場して、かつて彼らが「鬼畜」と断じ、「討て」と命じた「敵」となごやかに談笑している事実であろう。「敵」もまたなごやかな微笑を返す。

納得できる道は、たとえば国を護る行為をもつぱら美的、倫理的に見るのでなければ（それもたしかに一つの方法ではある）、それを「公状況」の大義名分から切り離して「私状況」においてだけにとらえることであろう。つまり、自分自身、自分の家族、友人、知己の「私状況」を護るために銃をとるのであつて、大義名分を自分に強いる努力のためにそうするのではないことを確認するのである。ここで、「散華」は「難死」とはじめて結びつく。「散華」のナシヨナリズムを「難死」がうらうちするるのである。私はこのナシヨナリズムを「戦敗国ナシヨナリズム」と名づける。

「戦敗国ナショナリズム」には、二本の柱がある。一本は「私状況」優先の原理。大義名分のロマンティズムから来るのではなく、「私状況」をくぐりぬけることよつてこのナショナリズムははじめて成立するのだが、それは「私状況」に根をもつゆえに土着的なナショナリズムたり得るだろう。もう一本は、「難死」から導き出されて来た平和思想である。

この平和思想という点においても、私は世界の多くの国の人間と、自分のちがいを感ずる。それは、一つには、過去において私たち日本人が最後には自殺用の武器さえもたなかつたという経験（原爆に対して、人間は対抗する手段を何一つもたず、そうして、世界でただ一つの被災国は日本なのである）彼らがもたないことである。彼らの平和はあくまで武器をもつた平和なのだろう。そして、私たちは戦争放棄をうたつた憲法をもち、すくなくとも表向きの軍備をもたず、徴兵制をもたない。世界を旅して歩いて、私が私たち戦後日本人の特質として感じたことは、私たちのものの考え方、心理、行動から軍事的な配慮が一切欠けていることであつた（それはプラスにもマイナスにも働く）。私はそれを「非軍事的思想」と呼ぶが、私たちの平和思想はたしかにその上に基礎をおいているのだろう。そして、「戦敗国ナショナリズム」は、それを一本の柱とする。

けれども、世界のナショナリズム流行は、いま、この「戦敗国ナショナリズム」を置き去りにしたかたちで行われているのだろう。戦勝国が植民地をもつかぎり、そしてその問題で手こずるかぎり、「戦敗国ナショナリズム」は戦勝国にもはつきりと存在していた。たとえば、アルジェリアでフランス軍がまだ戦つていたころ、私は、国家への忠誠と自分の反植民地主義との相剋に悩むフランスの若者に幾人か会つたことがある。「おれはどうしたらいいのかね。」ユース・ホステルのベッドの上でそう語つ

たアルジェリア戦線の負傷兵は、そのとき、「戦敗国ナシヨナリズム」を私と共有しているように見えた。しかし、アルジェリア問題は解決した。ということは、フランスを最後として（おそらくドイツ人の一部を除き）西洋が「戦敗国ナシヨナリズム」と手を切り、「戦勝国ナシヨナリズム」に安心して身をゆだねることができるようになったということだろう。そこで、彼らのナシヨナリズムは、世界のもう一つのナシヨナリズム、同じように「公状況」の大義名分の正当性の上にきずき上げられたアジア・アフリカの「新興国ナシヨナリズム」と握手し、また、癒着する。私はその一つの例を、フランスと中国のあいだに見る。

## 6

吉田茂氏が経済第一主義の政治方針を定めたことは、「私状況」優先の原則をはっきり政治の方針に定めたことであろう。日本の当時の国力の貧弱さがそれを必要とし、またアメリカの「公状況」優先への政治の切りかえの要求に対して、それを可能とした。池田勇人氏はその政策の忠実な後継者であつたことは言うまでもない。今日の「繁栄」はたしかにその原理の上に打ちたてられた。

けれども、その「繁栄」自体が、原理を大きくゆるがせる。無目標の繁栄、ただもうチャラチャラしてこれこれいいのか——老いも若きも（いや、ことに、老人と若者が）、右も左も（いや、ことに、右翼と左翼が）、性急に叫ぶ。「根性と気合いがないのは、戦後教育がなっていないからですよ」、「ズバリ言つて、アメリカ式の消費一方、欲望一方の生活が問題なんです」、「スバルタ教育をやらなくては」、「鬼軍曹が必要なんです」、「昔はもつと若者は純粹だった」——そうした声はさまざまなところ

から起り、人々は国家目標の欠如をなげき、「禁欲」の必要を説き、団体訓練をやれと論じる。これらの声は、結局のところ「公状況」の大義名分を求めているのだが、その人々の眼には、「公状況」優先の原理の上に組織をつくり上げているものが、イデオロギーの別をこえて、この上なく魅力あるものに映じて来てふしぎはない。たとえば自衛隊。あるいはまた、創価学会。

創価学会について、左右両翼の議論は奇妙に一致する。それは、「公状況」優先のストイシズムによつてつくられた組織と、そのストイシズムそのものの讚美と評価である。神島二郎氏は言う。「いや、鍛えるということはあるでしょう。個人的な意味でのストイシズムはないが、集団で鍛えるという非常に新しい面がありますよ。」あるいはまた、「日本をよくしよう」という「公状況」の大義名分についての評価である。長洲一二氏は言う。「学会では自分の信念で世の中を変えられるということを徹底的に教えているでしょう。これは戦後、日本から失われてしまったことですよ。」(『文藝春秋』64年10月号)

そうだろうか、という疑問がまず私の胸に起る。集団で鍛えるストイシズムがそんなに新しいものなのか(私はどこかでそれを経験したように思う)。また、自分の信念で世の中を変えようという意志は、あるいはそれを教えることは、戦前にあつて、戦後にはなかつたことだろうか(むしろ、それは逆なのではないか。私は新教育の産物の一人、また戦後世代の一人として怒りをこめて反対したい)。そしてまた、私は、見かけの規律正しき、美しさにごまかされしないで、その集団のストイシズムがどこへ向っているのか、また、信念によつて世の中を「どのようにして、どんなふうに」変えるのか、そのことこそみきわめたいと思う。現在の総理大臣佐藤栄作氏もまた学会のファンであり、彼もまた

神島、長洲両氏と同じやり方で学会をほめているのだが、私の眼には、すくなくとも学会は長洲氏の方向よりも佐藤氏の方向により近づいて行くように見えるのだ。実は、両氏の発言は、同じ雑誌の創価学会についての文章（本書『絶対帰依の美しさのなかで』——私はこのなかで、学会のファシズム化、保守党との結びつきへの危惧を書いた。二つの結びつきは、ジョンソンがゴールドウォーターの出現によって、強硬策をとらざるを得なくなつた事情に似るだろう）にふれて行われた座談会での発言なのだが、村松剛氏は「小田さんはなにか、ファシズムとならべて考えすぎてるように思います。」と同じ席上で述べた。それから一月のあいだに、私はミカン箱に三杯ほどの学会員からの投書を受けとつたのだが、その多くが、たとえば次のようなものであつた（投書は大多数署名入りだつた）。

「前略。君は、雑誌文春に創価学会に悪筆を取つたが、唯では帰れないぞ。行動隊が出勤して、君を『あずかる』ぞ」、「……念の為、君の将来を考えたればこそ忠告する」、「聖教新聞は三百五十万部、朝日、読売などくそくらえだ。君がいかに反抗したところで……つまらぬことを言う」と筆を折るぞ。」（参院議員の署名あり）そして、『潮』の出版局長は、電話で、私に、文句があるなら学会に來い、われわれには千四百万の大衆がついているぞ。おまえ一人がじたばたしたつて、という意味のことを言つた。あまりにも性急な人々がいる。アメリカ式にゆたかになり、人々が「私状況」の欲望のままに生きていることが墮落のはじまりだとして、「禁欲」を説く人の家の洗面器の蛇口からは湯がほとばしり出ているのであろう。ニューヨークの黒人街ハーレムの貧民組織のスローガンの一つには、「われわれはお湯の出ない室に住んでいる。」とあつた。それとも、お湯が出るような社会の青年は根性と気合いがなくなるとでもいうのか。彼は、米國選手にはまず根性と気合いがあつたと説くオリムピック

関係者と話し合うべきだろう。あるいはまた逆に、このごろの日本人は自分の「私状況」ばかりふりまわして困る、欧米では——と説く人は、フランスではガスも止るゼネストも平気でやり、アメリカでは鉄鋼スト、新聞ストを世間の悪評にかまわずやる、それほどの「私状況」擁護への根性と気合いにみちた国であることを想起したらどうだろう。私は、オリンピックをひかえているから要求は通るぞ、と言ったのに、それならストライキをやればいい、オリンピックをひかえているから要求は通るぞ、と言ったのだが一笑に付された。そして、「とにかく、オリンピックをすませてから。」そんな誰でもが言うことばを言うほど、彼は根性と気合いに欠けた人間であるのか。

そうした言説に見られるのは、「私状況」がまだまだ比喩的に言えばア、メ、リ、カ、な、み、で、ないのにそんなふうに着目してしまう危険だろう。本当には、日本の問題の多くは、それがア、メ、リ、カ、な、み、になつていないことから生じているのに、その逆だと考えることはまちがっているばかりでなく、将来に大きなわざわいを残すことになるにちがいない。

実際、外から「公状況」優先の風潮は、「戦勝国ナショナリズム」と「新興国ナショナリズム」の癒着のかたちで入り込み、さまざまな「公状況」の大義名分を誘発する。大義名分は、ときには個人のロマンティズムと結びついて、雄大な大構想となる。私 গতたとえば高坂正堯氏の『海洋国家日本の構想』（『中央公論』64年9月号）を読んでまず感じるのは、彼の「公状況」的な清潔なロマンティズムである。（彼はおそらく彼が自称し、世間もそう認めるように論理的常識から出発しようとする「現実主義者」ではなくて、美と倫理にそのよりどころを求めるロマンティストなのであろう。）その、「われわれはギリシア史について、アレキサンダーに征服されたものよりも、やはり征服者アレキサンダー

から多くを学ぶであろう。」という彼のロマンティズムは、彼の貧弱な具体的提案を大構想にまでふくらし粉のようにふくらませる。私なら逆の立場をとるだろう。政治の理念ではなくその實際を考察するためなら（たとえば、機能的な欠陥、理念の立派さにもかかわらず、なぜ、うまくゆかないかを見るためなら）偉人ソクラテスの政治理念よりも、ソクラテスを裁いた名もない「難死」的人生を送った人々の思想なり心理なり行動なりを考えて、そのなかから可能な方法を生み出すことに努めるにちがいない。同じように、アメリカ海軍が日本海軍を打ち破ったことが「太平洋戦争のもつとも簡単で、そしてもつとも重要な事実」であり、また現在もアメリカ海軍の圧倒的な優勢がまだつづいているなら、対アメリカの関係について、まだまだ私たちは「アレキサンダーに征服されたもの」から「多くを学ぶ」ことができるし、また、そうしなければならぬだろう。その視点に立てば、アメリカ第七艦隊は日本を防衛するという「公状況」のために存在しているのではなく、まずアメリカを防衛するという彼らの「私状況」のためにあるのだということがはっきりするにちがいない。その「私状況」に協力するために、日本が再軍備を始めたのだという事実を忘れてはいけない。現実主義者は「日本は第七艦隊に守られた島国」だというような事実の認識よりも、そちらの冷徹な事実の認識から出発する。そのとき、彼の「具体的」提案にあるような自衛隊の兵力を大幅に削減して、しかも、「アメリカとの軍事的結びつきを現在より大幅に弱め」ることがいかにして可能なか。むしろ肝心なことは、日本が侵略されようときれまいと、それは日本の問題であつてアメリカの問題でないのだという視点をまず確立することであろう。

ロマンティズムは日本の内部にも向けられて、たとえば政治家、企業家などの「実務家」に甘い

幻影を抱くことにもなる。企業の内部に入ってみれば、その成功のかなりな部分がただ運がよかったり、なるようになっただけのことにはすぎず、決して、江藤淳氏の説くように、「実務家」の時計が、八月十五日で止ってしまった知識人のそれとはちがって、ずっと動きつづけていたためでないことが明瞭となるのだが（むしろ、企業の内部で多くの人が江藤氏と反対の意見をもつ）、政治の領域にもそれは言えるにちがいない。実務家の時計も別に特別製のものではなかったのだ。CP5型原子炉輸入を実務家はズサンな契約で行なった。案の定、原子炉はうまく動かなかった。しかし、そのことによつて、予定通り動いていたとしたら得られなかった技術上の進歩を日本は得ることができた——これは一つの挿話だが、そうしたふしぎな循環に、日本の企業なり政治なりが多分に依存していることを、「公状況」的イデオロギーによつて一刀両断することも、ロマンティズムのオブラートに包むこともなく、冷静な眼でみきわめることがいま必要なだし、そのことから未来にとつて実りのある論議が生れて来るのだろうか。

ロマンティックな言説が横行するとき、なにをみんなチャラチャラ言っているか、こんな世の中では黙っているほうが立派だと孤高の沈黙を誇ろうとする人がある。これは「不言実行」という「禁欲」と美の倫理にうらうちさされているのだろう。しかし、その「沈黙の美学」は、たんに手を汚すまいというだけのことではないのか。あるいは、そこまでいかずとも、自らを孤独なる少数者とみなす人たちもいる。私は本多秋五氏の『戦後文学史論』（『展望』64年11月号）のなかにも（彼の論文自体には、私は共感した）、その危険を感じた。あるいはまた、丸山真男氏の、戦後民主主義の「虚妄」に賭ける云々の発言にも、私は同じ危惧を覚える。その考え方は、いくつかの点でまちがっている。たとえば、彼

らは少数者ではない。私よりはるかに年下の世代をふくめて、彼らの言説は共感者をもつ。いや、すくなくとも、現在では、まだまだ多数派の共感者をもつのだが、ただ、そのような悲壯感にあふれたストイックな考え方は、時代が動き、より新しい世代が出現するとともに、自ら後統部隊を絶つてゆくことになるだろう。それは、今日進歩陣営のなかに見られる「敵には寛大、味方には峻厳」の純粹好みの嚴格主義を支え、進歩陣営そのものを破壊させる。

今、おそらくもつとも必要なことは、横行し始めた「公状況」に対して、もう一度「私状況」を確立することであろう。「戦勝国ナシヨナリズム」に対して「戦敗国ナシヨナリズム」、ロマンティズムに対してリアリステイックな眼、「砂金」に対して「雑巾」、「散華」に対して「難死」——戦後民主主義は、かつての前者の圧倒的優勢に対して、「民主、平和、文化国家日本」の価値として後者を育てて来たのだが、その努力はある程度実った。ということ、それが一部の人が言うように、行きすぎたほど十分でなく、また、他の一部の論者が説くごとく、それがすべて「虚妄」ではないということだろう。二つが対等なものとなつて、そこから新しい「公状況」が生まれて来るのが理想だが、それにはまず、「公状況」的なものを「私状況」にたえずくり返してぐらせることが必要なのにながいない。「散華」を、ただそれだけを、一回きりの瞬間的な極限状況の下で見れば、それは純粹な美であり、倫理のかがやきであろう。しかし、私は、それを雑駁になることをおそれず、短篇小説的方法よりも長篇小説の方法をとつて、日常的な長い時間のひろがりのなかにおいてみたいと思う。過去をふり返つて八月十五日に凝集した時間の点の上におくのではなく、それからの二十年という長い時間、あるいはこれからのさらに長い未来の時間の緩慢なひろがりのなかにおくとき、それは必然的

に「難死」と衝突し、また交錯しなければならぬだろうが、私はいわばひろがりのなかの「難死」の数を増大させ、速度をまし、方向をさまざまに変化させることによって、衝突、交錯の機会を日常的な不断なものにしたいのである。そのとき、「散華」の美しい衣は汚れ、かつての純粹な青年の顔だちはあぶらぎった中年男のそれに変っているかも知れない。しかし、その男が偉大な歴史の主役でないとは、誰も言えないであろう。

（『展望』1965年1月号）

つづきは製品版でお読みください。